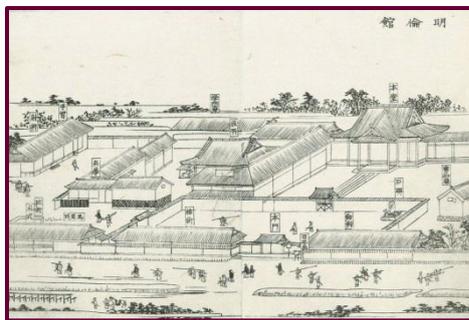


長州藩の学校

長州藩では、藩政の推移と深くかわりつつ、早くから家臣の教育に力を注ぎ、積極的な「人づくり」政策を行っていた。また、藩校や郷校による諸士子弟の教育のみならず、寺子屋や私塾など一般庶民を対象とする教育も活発であった。教育熱心な風土を背景に山口講堂も産声をあげ、激動する時代の趨勢とともに山口は藩の人材養成の拠点となっていたのである。

幕末期の主な藩校等



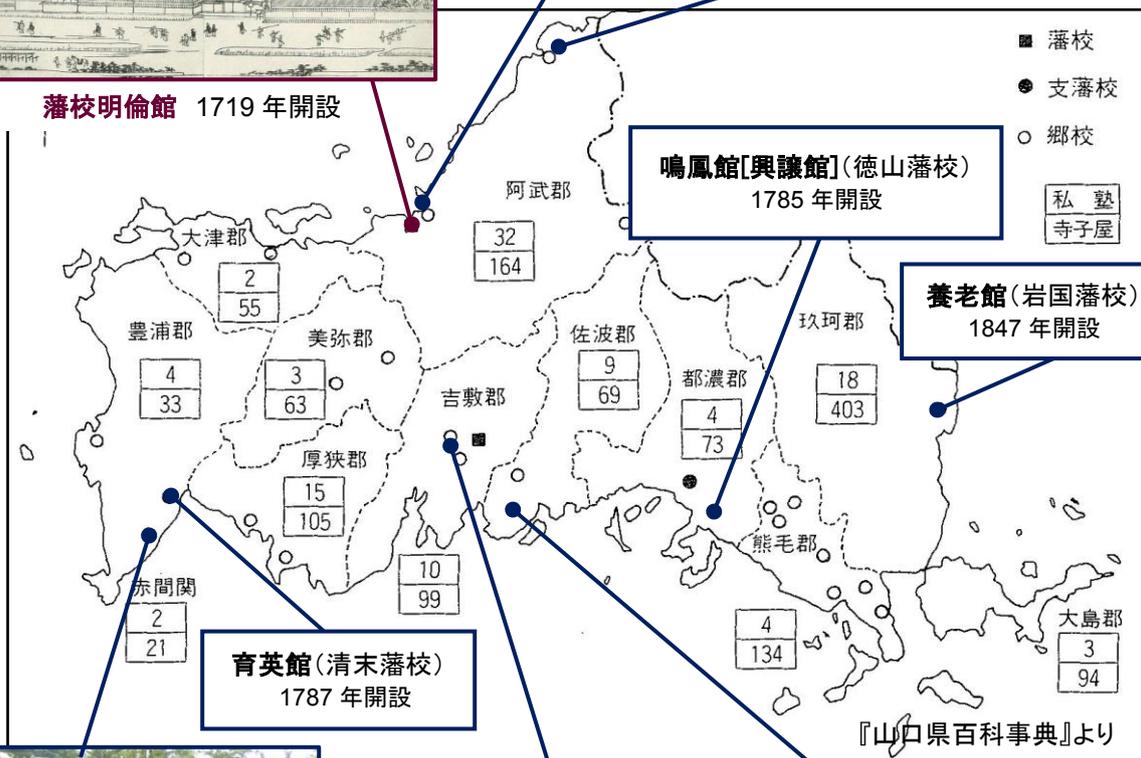
藩校明倫館 1719年開設



松下村塾(私塾)



育英館 1735年開設
(須佐、益田氏の学館)



敬業館(長府藩校)
1792年開設

憲章館 1805年開設
(吉敷毛利氏の学館)

時観園 1628年開設
(右田毛利氏の学館)

山口講堂[山口講習堂](私塾)
1815年開設

越氏塾(私塾)
後に藩校明倫館の直轄となり、
三田尻講習堂と改称

藩校明倫館

●創立 享保4(1719)年、5代藩主毛利吉元によって萩に創建された。吉元は財政再建の最中ながら、人づくりこそ治世の根底と考え、多額の経費を投じて藩校を設立した。明倫館という名称は「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」という孟子の言葉による。

●拡張 嘉永2(1849)年、14代藩主毛利敬親によって萩・江向に移転拡張。面積は約15倍、生徒数も10名程度から数百名に増すなど、飛躍的に規模を拡大した。広大な敷地に聖堂、講堂、書庫、書生寮、槍・剣・射術場、医学所等を完備した総合学園だった。特に、洋学による科学的・合理的思考の養成を進め、藩士の世界観を広げることに成功した。

●山口明倫館 文久3(1863)年、藩政とともに文教の中心が山口に移り、山口講習堂は山口明倫館と改称。従来の明倫館は萩明倫館と呼ばれた。以後、山口明倫館を中心に、萩明倫館と三田尻講習堂を両翼とする教育機関が整備されていった。

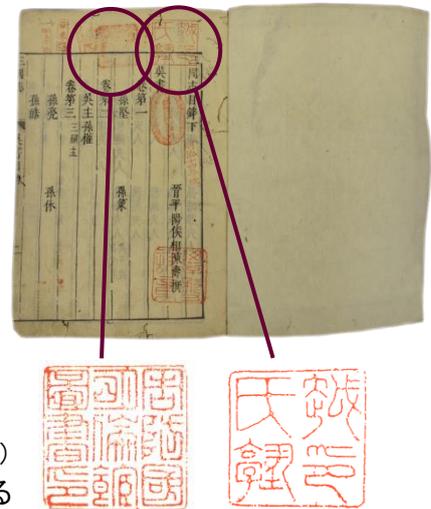
えっしじゆく
越氏塾

儒医・河野養哲が自宅に三田尻御船手組の子弟を集めて開校した私塾で、その時期は藩校明倫館以前に遡る。明倫館創設の際には、高弟の山根華陽らが同館の教師に登用された。明和4(1767)年に明倫館の附属校となり越氏塾と公称の後、明倫館の支配を離れて三田尻の郷学となっている時期もあった。

しかし幕末の万延元(1860)年、再び明倫館直轄となり、建物は上ノ丁から船頭町に移転拡張した。西洋銃陣の教練場も完成。文久3(1863)年、山口明倫館の管轄下に入り、翌年に学習堂、更に、講習堂と改称した。三田尻講習堂は、長州藩の軍事的拠点となったのである。

明倫館の稽古日割(享保7年)

稽古内容	
1日	休業日
2日	儒書 十文字鍵
3日	儒書 新陰流剣術
4日	兵書 槍術
5日	弓 新陰流剣術
6日	— 新陰流剣術
7日	儒書 十文字鍵
8日	儒書 新陰流剣術
9日	兵書 槍術
10日	弓 新陰流剣術
11日	— 新陰流剣術
12日	儒書 十文字鍵
13日	儒書 新陰流剣術
14日	兵書 槍術
15日	休業日
16日	弓 新陰流剣術
17日	儒書
18日	儒書 新陰流剣術
19日	兵書 十文字鍵
20日	弓 新陰流剣術
21日	— 槍術
22日	儒書 新陰流剣術
23日	儒書 新陰流剣術
24日	兵書 弓・十文字鍵
25日	— 新陰流剣術
26日	儒書 新陰流剣術
27日	儒書 新陰流剣術
28日	休業日
29日	兵書 弓・槍術
30日	休業日



越氏塾の蔵書(山口大学図書館所蔵)
越氏塾(右)と周防明倫館(左)の蔵書印が見られる

毛利敬親 文政2(1819)－明治4(1871)



長州藩第14代藩主。

文政2(1819)年2月江戸麻布邸にて、第12代藩主斉元の第1子として生まれ、天保8(1837)年4月、19歳で第14代藩主となった。

その時代、藩財政は長年にわたる赤字で貧窮し、世情は混沌としていた。敬親は藩財政改革や教育改革を行い、藩を立て直した。維新後の明治2(1869)年に版籍を奉還し、子・元徳に家督を譲って隠居した。

幕末の人材を創る

教育熱心だった敬親は藩校明倫館を15倍の敷地を持つ規模へ拡張する。西洋医学・兵学など洋学も取り入れた総合学園であり、時勢に適応する教育による人材養成を図った。

明倫館の隆盛が、藩内での郷校・私塾・寺子屋等教育機関の充実を促し、それまで脚光を浴びなかった中級・下級武士が歴史の表舞台に出るきっかけを生んだ。

萩藩では、山口来訪や江戸参勤の途中に、藩主が山口講堂の門弟の勉学を観閲することが慣例であったが、敬親も幾度となく足を運んでいる。また、十代の若さで明倫館教授になった吉田松陰を取り立てたことも有名で、藩主自ら勉強の進み具合を何度もテストしたというエピソードもある。



亀山公園にある毛利敬親の銅像

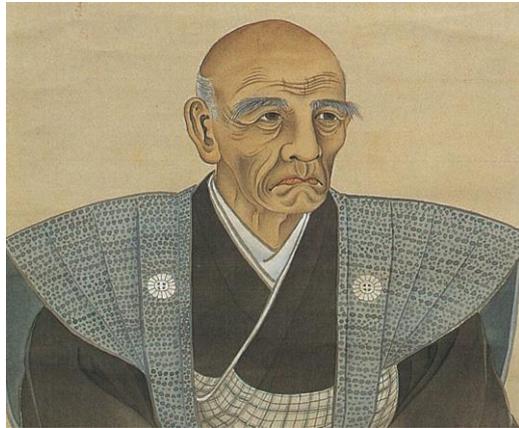
明治33年、敬親と支藩の当主たちの銅像がここで除幕されたが、戦時中ほとんどの銅像が供出され、敬親像だけが今もたたずんでいる

時代を拓いた“そうせい候”

家臣に対して異議を唱えることなく「そうせい」(うん、そうしなさい)と常に返答していた敬親は、世上“そうせい候”と呼ばれていた。島津斉彬や松平春嶽のように国政を直接リードする君主ではなかったが、時代の胎動期において人物眼のある、物事の理解力に富んだ名君だった。長州の独自性は、敬親に負う所が大きい。

村田清風

天明3(1783)－安政2(1855)



萩藩士、村田家の長男として三隅村に生まれた。父親は代官。14歳で藩校明倫館に入学し、成績優秀で学費免除、「明倫館書物方」に任命された。

26歳より行政官として50年間、5代の藩主なりふさ なりひろ なりもと なりとお たかちか(斉房、斉熙、斉元、斉広、敬親)に仕え、江戸屋敷や萩藩庁に於いて要職を歴任し、民政改革、文武奨励、兵制改革に尽力した。財政に明るく、特に敬親とは最強コンビで天保の改革を推進した。

藩政改革と人材育成

家老に抜擢され財政再建を任された清風は、周囲から激しい反発を受けながらも、負債8万貫の返済のための儉約の徹底や、武士の負債整理と士風の一新、四白政策(紙、蠟、米、塩)の振興など行財政改革を断行する。その一方、教育の重要性にも着目し、人材育成に力を注いだ。

- 江戸藩邸内に藩校有備館を設置
- 学問を奨励して学者を優遇し、藩校明倫館を拡張
- 医学教育充実のため、医学稽古場を設け、医学・蘭学の研究に努める
- 隠居後は、生家の三隅山荘に私塾尊聖堂を開設し、身分を問わず近隣の子弟を教育した

清風の改革路線は、周布政之助へ引き継がれた。教育政策によって、吉田松陰など多くの傑物を輩出し、明治維新の起爆力となっていたことは言うまでもない。



三隅山荘(長門市)

戦爺さん・村田清風

清風は、天保14(1843)年、福江村羽賀台で大操練(軍事訓練)を実施し、藩士の士気を引き締めた。長州武士団の意気高揚の契機を作った人物でもある。早くから国防に着目し、事ある毎に海防論と武備充実を強く説いた。そのため戦爺さんと呼ばれることもあったが、吉田松陰や周布政之助など、若き志士たちに大きな影響を与えた。

周布政之助 文政6(1823)－元治元(1864)

萩藩士、周布家の第5子として生まれた。家禄は68石。16歳で藩校明倫館に入学し、成績優秀で「明倫館廟司」に任命された。26歳で藩に登用され、蔵元検使暫役として山口に駐在、31歳で政務役筆頭となる等藩政を仕切る若手官僚の第一人者だった。

富国強兵を目標に村田清風が推進した藩政改革の跡を継ぎ、革新的政治家として藩内外の志士を指導し、明治維新への道を開いた尊王攘夷運動に全力を注いだ。



元治元(1864)年、蛤御門の変を起こし、幕府の征長軍を迎えることとなり、藩の実権も恭順派に握られたことなどから、責任を感じ、9月26日、山口市矢原の庄屋・吉富邸で自刃した。42歳であった。その志は高杉晋作や木戸孝允、伊藤博文らへと受け継がれ、明治維新へと開化した。

政之助の顕彰碑(山口市矢原)



周布の人材育成

有能な下級武士が政策に参加できる道を開いた。また、軍政改革の一環として洋学を推進し、西洋学所を設置。大村益次郎を登用。

吉田松陰の良き理解者で、松下村塾の高杉晋作、久坂玄瑞、木戸孝允らを積極登用し庇護した。攘夷後開国論だった周布は、西洋の事情を熟知しなければ将来国の不利益になると考え、イギリスに5人の若者(長州五傑)を秘密留学生として送り出した。



長州五傑

酒好きの正之助

周布は酒癖が悪かったといわれる。慰労の酒に酔って「容堂公は尊皇攘夷をおちやらかしなさる」と、土佐藩士たちの前で藩主の山内容堂を侮辱。激怒した容堂公は処断するよう迫るが、萩藩では「周布は不敬を悔いて死にました」と言いつつ謹慎処分にし、麻田公輔と改名させて騒動を終結した。

政之助の酒が過ぎるのを諷めるために木戸孝允が書いた戯画が、山口県立博物館に所蔵されている。